



### MIKI INTERNATIONAL ASSOCIATION

VOL.38 2010.3

平成 22 年 3 月

三木市国際交流協会

#### 2009 Christmas Party in Miki

#### Hundred and twenty members of MIA enjoyed meeting at Micky Hall on December 12

MIA では、昨年12月12日市役所みっきいホールで、恒例のクリスマスパーティーを開き、外国人ゲスト20名を含む120名のみなさんに参加いただきました。司会進行は河越恭子、片山式子、カー・ケリー、アンドレアの4人のみなさんにお願いし、冒頭のあいさつを有野理事、祝辞を松本教育長にしていただいた後、着物・民族衣装の外国人など外国人ゲスト20数名に自己紹介を日本語でしていただきました。会食・歓談ではモンゴル出身のダイチンさんに乾杯の音頭をお願いし、それぞれのテーブルを囲んで楽しい会話が弾みました。ミニコンサートPart1では神戸から招いた東町待合楽団にクリスマスソングやオリジナル曲を聞かせていだきました。また、ミニコンサートPart2では、昨年に続いてダイチンさんを招いて「モンゴルの民族音楽・ホーミー」を歌っていただきました。プレゼントタイムでは小物などのプレゼントをあてて喜ぶ姿が何度も見られました。最後に駆けつけていただいた藪本市長のあいさつの後、バンド演奏をバックに「White Christmas」を大合唱して、2時間半にわたるパーテイーを終えました。なお、着物の着付けは岩崎和子さん、お茶席の接待は中筋洋子さんのグループにお願いしました。ご協力とご参加

なお、看物の看付けは岩崎和子さん、お条席の接待は中筋件子さんのグループにお願いしました。こ協力とこ参加ありがとうございました。



#### " The time has changed"

Self Introductions in Japanese were done by many foreigners on the stage. Almost of them can make it fluently in Japanese not in their native languages.

#### 2009 Christmas Party in Miki

They had the speeches of Mayor Yabumoto, MIA Member Arino o, and Superintended Matsumoto. And had the concert-time by Kobe Higashimachi Dentist Band and Mongolian Hormy Singer Daichin. They also had the tea ceremony service instructed by Sado Master Nakasuji.



会長あいさつ **有野 勇 理事** 

市長祝辞 松本明紀教育長

いる中国モンゴル自治区出身の留学生です。昨年5月のMIA総会にも講師としてお招きしました。草原の国モンゴルで通信の役を果たしたという独特の発声法は世界に類を見ないものです。みなさんは、立派な民族服に身を包み、浪々と複雑な音をひびかせるダイチンさんのホーミーに聞き惚れました。

#### 会食・歓談

会場には、8 つの円テーブルを設け、ドリンク(アルコール類は除く)やスナック、オードブルなどを用意しました。一つのテーブルに、平均して 15 名程度の人々が集まり、日本を中心に、英語、中国語、韓国語、スペイン語などの会話が飛び交いました。10 年ほど前と比べると、外国人のみなさんの日本語能力がかなり伸びていると感じられます。関西国際大学の留学生や MIA 日本語教室に通っている人が多いせいでしょうか。嬉しいことです。



hristmas Party in Niki

#### 神戸東町待合楽団

団長の磯島よしひろ氏は歯科医です。自ら作曲し歌う、いわゆるシンガーソングライターですが、家業のかたわら同好の志を集めて練習しています。時々、三宮を中心にライブ活動をしていますが、三木での初公演となりました。当日の編成は Vocal & Guitar 磯島よしひろ、Guitar & Vocal の七雲、Keyboard & Vocal 、の三人でした。クリスマスにちなんだ曲として「the First Nowell」と「ママがサンタにキッスした」を感情込めてきれいなハーモニーで聞かせました。

元々、オリジナル曲を大事にしているグループです。 「花火」「夕立」「冬のポケット」は、いずれも磯島氏の 手になる曲です。やや長めの曲でしたが、美しいメロディーで優しく心に沁みる歌詞でした。

#### ダイチンさんの「モンゴルホーミー」

ダイチンさんは神戸大学大学院で民俗音楽を研究して



#### お茶席と着物姿

着物は初めてという留学生のみなさんは、嬉しくてた まらない表情でお茶席に着き、師匠の中筋さんなどから 作法を習い、真剣な表情に変わってお茶を立てていまし た。日本の伝統をお見せし、体験してもらうのも、この ようなパーティーの大きな目的です。



#### 三木英語落語寄席 2010 English Rakugo in Miki

MIA invited "ado English Rakugo Group" on January 31 to Miki from Osaka. The members of this year were Entatei Lance, Nanyutei Eika, Hayashiya Someta and Hayashiya Emimaru. And Tamagoya Kimiko took a role of MC. Noriko Katayama of MIA took a role of "Mekuri" who turns papers to show "title" of each entertainer. Around hundred and twenty people from Miki and other cities enjoyed it and laughed much.

骨釣り Bone Angler 演多亭卵酢 Lance



三木では3回目の公演、カナダから来日し、剣道や合 気道修行にも励んでいる。今回は妙な下心から、人骨を 釣ろうと企てる男の噺を披露しました。

代脈 Green Doctor 南遊亭栄歌 Nanyutei Eika



名古屋で活躍する英語落語愛好家、実は、循環器専門の内科医。全日本社会人落語選手権大会で3連覇しているだけあって、話芸は抜群。医師免許不要時代を背景に、医師見習いが往診先で一騒動する話で笑いを誘い出しました。楽屋裏でお囃子に加わり笛を担当するなど器用な人でした。



フィナーレ (右から)

(司会) たまご家きみこ: (演者) 林家笑丸・林家染太 演多亭別酢・南遊亭栄歌 : (めくり) 片山式子 のみなさんです。

四人癖 Habits 林家染太 Hayashiya Someta



今回は林家一門の演者ふたりをお呼びしましたが、その一人です。平成12年(2000年)に入門以来、英語落語公演は国内だけで100回を超えています。

また、ニュー・ヨークやロンドンなどの海外公演もこなし、テレビ、ラジオにも出演するなど大活躍中です。 三木では古典落語の代表作「四人癖」を演じました。

これは、ダイアン吉日が三木で演じたことがある噺です。さすが、プロという感じで、笑いが絶えませんでした。

焙じの茶 Roasted Tea 林家笑丸 Hayashiya Emimaru



笑丸も同じく林家一門です。平成10年(1998年)に入門以来、上方落語会屈指の多芸な落語家として育っています。NHK新人演芸大賞・新人賞(関西代表)受賞、なにわ芸術祭新人奨励賞などに輝いています。「焙じの茶」は寄席芸の一つ、「二人羽織」を取り込んだ話です。落語の伝統を受け継ぎ、次世代に引き継ぐことのできる演者として、ますます伸びていかれるのではと感じました。「ado 英語落語」を招いての「英語落語寄席」8回を数えますが、毎年、新作を持ってこられます。翻訳から練習、出演と大変な努力を重ねておられるようです。来年も、三木公演をお願いしています。

#### 1月23日 教育センター 中研修室 第3回国際理解講座 「ブラジル移民と『さんとす丸』の思い出」 元外国航路船長 川野 明 氏



Former Captain Kawano talked his meeting with Japanese emigrants from Kobe to Brajil on his ship "Santosu-Maru."

川野さんは昭和9年徳島生まれです。昭和27年 (株)大阪商船へ入社、航海士として、後には船長として外国航路を往来されました。昭和64年に退職後も神戸海技専門学院講師として後輩の育成に携わり、今も、海技教育に関係されています。

今回は「さんとす丸」乗船時に出会ったブラジル移民のみなさんとの出会いと別れを中心に、語っていただきました。テープ「蛍の光」をバックに語られたサントス港別れのシーンでは、ご本人も会場の私たちも感極まって涙しました。70 名近いみなさんに参加いただきました。

私はおよそ40年間、外国航路の航海士と船長を務め、 退職後も小型船舶操縦士免許取得のための講師として海 に関わっています。すでに75歳になりますが、子ども の頃から好きであった海と船に関わる仕事を続けること ができ、我ながら幸せ者だと感謝しています。それなり に充実した人生をプライドとともに生きて参りましたが、 最近、気になることが出て参りました。

というのは、海に囲まれたわが国にとって重要である はずの「海運」が、私たち国民の目線から消えかかって いるのではないかということなのです。

その理由のひとつは、ふたつの商船大学が他の総合大学に併合されてしまったことです。今ひとつは、一時は2000 隻もあった日本国籍外航船が、ついに100隻を切ったことです。多くの外航船が安い税金で済む「便宜置船」となり、日本の船でありながら外国籍です。外国人乗組員も増えています。

ここで、本題に入る前に船の話しをさせてください。まず、船の大きさですが、タンカーに絞って話します。

昭和 25 年頃から大量輸送時代が始まりました。タンカーのトン数は、年とともに、10 万トン、20 万トンと巨大化し、昭和 50 年には48.5 万トンとなりました。トン数といっても分かりにくいのでサイズでいいます。例えば、私が乗った最大の25 万トンのタンカーですと、長さ330m、幅60m、深さ29mです。これに原油を満載すると喫水(船底から水面までの距離)は20m以上になります。その後、昭和55年には56.5 万トンタンカーができましたが、そのサイズは長さ460m、幅69m、深さ31m、満載時喫水は25m近くになります。

さらに言いたいのは、日本の年間原油輸入量です。それは約2億2千万トンですが、これを30万トンタンカーで運ぶと、約740隻分に相当します。東京ドームを升とすると30万トンタンカー3隻半で満杯になりますが、日本はこれを1日半で消費してしまいます。

次に、こんな巨大船の重大海難事故について話します。 「ぼりばあ丸」「かりふおるにあ丸」「尾道丸」の例を取りあげてお話しします。偶然ですが、これら3隻とも3.4万トンの鉄鉱石、石炭専用船です。

「ぼりばあ丸」は、昭和44年1月、北太平洋で時化に遭い、その船体を真っ二つに折られました。すぐ、SOSを発し救命ボートを降ろそうとしましたが失敗しました。近くを航行中の「健島丸」が駆けつけましたが、55分後に沈没、2名を助けましたが、船長以下31名は行方不明となりました。房総半島の南南東沖約1,500kmの海域でした。

「かりふおるにあ丸」は、昭和45年2月、同じ北太平洋海域で時化に遭い、6名が転落、大破、救命ボートの降下にも失敗しました。ニュージーランドの冷凍物運搬船は現場に急行し、船長以外の22名を救出しました。船長は部下たちが救助されたのを見届けると眼下の救命ボートに対して「危ないから離れなさい」と指示し、軽く手を振ってブリッジの中に入りました。その20分後、船は逆立ちするように沈没、救命ボートの乗組員たちは「キャプテン!!!」と叫び、泣きじゃくりながら見送りました。

「尾道丸」は、昭和55年12月30日、石炭を積んで日本へ向け航行中、ほぼ同じ北太平洋海域で時化に遭い、船体を折られ、救命ボートの降下にも失敗しました。付近を航行中の日本船「だんぴあ丸」(5万トン)が救助に駆けつけました。実はこの「だんぴあ丸」の尾崎船長は私の同級生です。彼は、現場に着くとすぐに尾道丸の北浜船長に「石炭を積んでいる貴船は、すぐには沈みません。時化が治まるまで待ってください。必ず全員救助しますから」と連絡しました。しかし、31日になっても時化は治まらず、1月1日元旦になって、やっと救助を決行、29名全員を救出しました。この場合も、北浜船長は退船を拒否しましたが、全員が無事であるのを確認してやっとボートに乗ったということです。この、海難事故救助のニュースは全世界に広まりました。

外航船を預かる船長たちは、これだけの責任感と勇敢 さを胸に、日本のため、大自然と闘いながら、今も7つ の海を航海しています。 では、移民船の話をさせていただきます。私が移民船乗組員として、多くの同胞をブラジルへ送ってから、すでに、40数年の月日が流れました。しかし、今でも当時のことを話したり思いだしたりする度に、目頭が熱くなります。生まれ育った祖国を後に、未知の国へ旅立って行った彼らの心の内を知る者として、また、ブラジルのサントス港で涙ながらに別れた者として、どうしても寂しい気持ちが湧いてきます。日本からブラジルまでの、わずか 40数日の共同生活でしたが、これほど深い信頼関係が生まれるのかと感慨に耽ります。そして、この瞬間も、彼らが日本の裏側、ブラジルのどこかで、元気で頑張っているのだろうかとか、さんとす丸のことを思い出してくれているだろうかなどと、思うだけで涙が溢れそうになります。移民船乗組員として、移住の仕事ができたことは、今も私の誇りです。

まず、本題に入る前に、「ブラジル」についておさらいをしておきます。ブラジルの面積は日本の22,5 倍、人口は1億9300万人、人口密度は1平方キロ当たり22人です。日本人が移民として彼の国に受入れられたのは、「日本人は農業の神様」というブラジルでの見方があったからだそうです。ブラジル移民の始まりは、1908年(102年前)に、第1陣(約790名)が、笠戸丸でブラジルに渡ったのが始まりです。その後、戦争中の空白期間がありますが、昭和48年、最後の移民船「ぶらじる丸」まで、約50年にわたり移民事業が続き、約26万人の同胞が移住しました。

私が移民船「さんとす丸」に乗船したのは、昭和38 年、39年、40年です。ブラジル移民真っ盛りの時代で す。いずれの航海も満船状態で、月1隻ずつ、神戸から 出航しました。当時、移民船としては、「さんとす丸」「ぶ らじる丸」「りおでじゃねいろ丸」「あるぜんちな丸」な どが就航しており、多いときには600人以上が乗船した ように記憶しています。移民の形としては、戦後は呼び 寄せ移民、花嫁移民などがありました。移住が決まれば、 神戸にありました移民収容施設に、約1週間入り、そこ で渡航手続き、語学研修、健康診断、ブラジルについて の勉強などを修めて、いよいよ乗船するわけです。出航 当日朝、乗船が始まり夕方には出航します。出航時間が 近づくと、岸壁は見送りの人たちで溢れて立錐の余地も ないほどになります。二度と会うこともないであろう肉 親や友人との涙の別れ、二度と踏むことがないであろう 生まれ育った祖国との別れです。乗組員ももらい泣きす るこの場面は、生涯私の脳裏から離れないでしょう。先 が見えないほどのテープが舞う中で、お互いに手を振り 名前を呼び合う姿は涙なしには見られませんでした。

出航後、しばらくは身の回りの片付けや船酔いなどもあり、乗組員との交流が始まるのは2,3日後となります。移民のみなさんは、生まれ育った祖国を後にして、遥か日本の裏側、未知の国へ向かう訳ですから、その心中は期待よりも不安で大きく揺れていたことでしょう。そんな中で、「みなさんに不安を与えるような言動はしないよう」が、船長の至上命令であったように記憶しています。日本を離れてからブラジルまでの航海中、「移民船三大行

事」として演芸会、運動会、赤道祭の催しがあります。 2,3 日も経つと個人的な付き合いも始まり、少しずつ親 しみが沸いてくることになります。

私にも、今も忘れることのできない一人の青年との交 流がありました。今日は、その青年にスポットを当てて、 お話をさせていただきます。彼を仮にK君としておきま す。当時、私は二等航海士でしたので、正午前に船橋(ブ リッジ) に上がり、航海当直をしていました。一人の青 年が船橋にきて、「中を見せてください」と声を掛けてき ました。私より5,6歳下の青年でした。「どうぞ」とコー ーヒーをだして雑談を交わしました。今でいうイケメン で、非常に礼儀正しい青年でした。そのうちに意気投合 して、彼は毎日のように訪ねてくるようになりました。 このK君は、東京農業大学を卒業したばかりで、家庭事 情のために、単身でブラジルへ渡るということでした。 ある日、自分の部屋に招いて酒を酌み交わしていた時、 K 君は突然、思わぬことを口にしたのです。「船員さん たちは、僕らを大事にしてくれますが、所詮、われわれ は棄民(キミン)ですよ」と。私は愕然としました。乗 組員なら誰も知っている言葉ですが、直接、移民のみな さんから聞くとは夢にも思わなかった言葉でした。

しかし、私は今も「あれはキミンと言われてもしかたがない」と思っています。「国からうまいことを言われて出てきたけれど、そういいながら、もうすでにわが身はブラジルへ向かっている」という複雑な気持ちがあったのではと思いました。それが、キミンということばになって出てきたとき、なんとも、やりきれない気持ちになったことを覚えています。後は、励ますしかありませんでした。

さて、神戸を出て 13 日目、ロスアンゼルス港に入港します。しかし、ここではトラブル防止のため移民のみなさんは上陸禁止です。みなさんの不満顔が思い出されます。ロスを出ると、一路、パナマへ南下するわけですが、北太平洋と違いメキシコ沿岸はめったに時化ることもなく平穏な航海が続きます。この間に行なわれるのが、運動会、盆踊り、演芸会など、お客さん中心で盛大に行なわれます。これからパナマ運河通航までが、彼ら、移民のみなさんにとって、もっとも心に残る日々であったろうと思います。中でも、パナマ運河を通行する日は、朝からデッキ上をウロウロ、初めて見る光景に歓声をあげ、それはもう大変でした。私は、このパナマ運河通行が、彼らにとって最大の行事ではなかったかと思っています。彼らが、なぜ、そんなに興奮するのか。ここで、パナマ運河の構造について簡単にお話しします。

- 1 太平洋、大西洋からの高低差約 26m です。
- 2 3段のロックによって、動力を使わず水の力だけで上下する仕組みになっています。(図で説明)
- 3 水路は全長約 80km 最小幅 192m
- 4 時間は朝一番に入ると大西洋に抜けるのは、夕方 通過後は大西洋側のクリストバルという港に寄り、食料、 水、燃料を補給した後、ブラジルへ向け静かな航海が始 まります。この一日はみなさんにとって、まさにお祭り 騒ぎの一日です。あっという間に上り下りする海面、反

対方向から進んで来る他の船。大型客船でもすれ違えば 大歓声です。相手船と互いに手を振り、声を掛け合い忘 れられない一日だったと思います。 K 君もはしゃいでい ました。こうして、パナマ運河を通過すると、後は南米 東岸の 2,3 港に寄港し、ブラジルへ向かいますが、5 日 ほどで赤道通過となります。

この航海最後の行事として「赤道祭り」が行なわれます。「赤道祭り」とは、いろんな説がありますが、北半球から南半球へ通過するときに、北半球の北海神から南半球の南海神へ通行許可の鍵を渡し、その通航を許可するという意味があるようです。(仮装行列)ブラジル移民船の最後の行事ですが、これも船客中心となり、盛大な仮装大会となります。船客の中から一番の美人を選んで女王に祭りあげ、船長が魔王に扮して頭から海水の洗礼を受けたりします。一日中大騒ぎ、移民のみなさんは、後のことなど忘れてしまうような騒ぎとなります。私の親友 K 君も赤鬼か、青鬼に扮して頑張っていました。

赤道祭りが終わるとブラジルまで後わずかです。この 頃から、みなさんの口数がだんだん少なくなってきます。 彼らの心境の変化がよく分かるだけに私たち乗組員にと っても辛い時期となります。先程、移民にはいろいろな 形があると申しあげましたが、近親者よりの呼び寄せ移 民は最高です。それに反して、行く先さえ不明で、とり あえず行ってからという人も中にはありました。(一時収 容施設に入る)彼らの上陸地、サントス港に着く前日、 リオデジャネイロに入ります。ここからサントスまでは 一晩の航海となりますが、ここで一般乗客として、怪し げな男数人が乗り込んできます。料金を払っての客です から断わるわけにはいきません。彼らの目当ては、先程 お話した行き先のはっきりしていない移民です。ことば 巧みに誘ういわば人買いみたいな連中で、私たち乗組員 も彼らには警戒していました。実際、こういう連中に騙 されて酷い目に合った人もいたといわれています。

日本を離れて 40 数日目、彼らにとっての新天地ブラジル、サントス港に入港となります。早朝の着岸後、入国審査などに時間を要し、移民のみなさんが下船するのは午後になります。「蛍の光」のもの悲しい曲が流れる中、ブラジルの大地に第一歩を踏み出す移民のみなさんとの別れ、本当に忘れることができません。男も女も握手を交わし、時にはしっかりと抱き合い、「頑張れよ。病気をするなよ」「一花咲かせて、また日本に帰ってこいよ」。まさに涙、涙の別れでありました。日本での別れでは家族や友人がいましたが、ここでは 40 数日間ともに暮らした乗組員だけが見送る側です。私は日本を離れるとき、また、ブラジルで彼らを見送るときに流された「蛍の光」を聞くと、今でも、あのときのことがハッキリと思い出されて目頭が熱くなります。

K 君は元気でいるだろうか。元気でいればもう 70 歳になるはずです。彼とは、さんとす丸下船後もしばらく音信がありましたが、やがて、途絶えてしまい、今ではまったく分かりません。時々、思い出すと涙がでます。今も、この瞬間もブラジルで多くの同胞たちが暮らしています。K君との別れのとき 2,3 歩進んでは振り返り、

また、2,3 歩進んでは振り返り、最後に倉庫の向うに回るとき、深々と頭を下げて目を拭いながら消えてゆきました。何か大声で叫んでいたようにも思いますが、私には聞こえませんでした。本当にいい青年でした。今でも、「只今、帰りました」と電話でも掛けてこないかなと考えたりしています。

2008 年はブラジル移民 100 周年の記念行事が行われました。NHK では「ハルとナツ」というドラマを放映しましたから、会場のみなさんもご覧になったのではないかと思います。また、何年か前に、東京のある大学の学生たちが「ブラジル移民の足跡をたどる」と称して、ブラジル・サントスを起点に移民のみなさんの歩んだ道をたどり、レポートをまとめました。その一節をご紹介して私の話を終わらせていただきます。その一節とは、

「私たち日本人は、移民としてブラジルに渡った 20 数 万人の人たちのことをもっともっと知らなければなら ない。そして、彼らのことを決して忘れてはならない。」 ご清聴ありがとうございました。





この建物は、1928年(昭和3年)に「国立移民 収容所として建てられ、ブラジルなどの中南米諸 国へ25万人を送り出しました。川野さんの話に出 てくる施設はこの建物です。

アクセス:三宮から市バス⑦系統乗車 山本通3丁目バス停下車・北西へ徒歩3分

#### 2009年度PHD研修生

#### 研修報告会

2月13日、市役所大会議室で財団法人 PHD 協会主催の「研修生帰国時報告会」が持たれました。

毎年、PHD協会はアジア各国の農村から青年たちを日本に招いて、農業や保健衛生などの研修をさせる事業を続けています。今回は、ネパールのビショさん、インドネシアのロザさん、ビルマのザーナウンさんの3人でした。みなさんは、パワーポイント映像で故郷の村の様子を紹介し日本での研修について報告しました。



研修報告会に集まったみなさん

#### ビショさん (ネパール・男性)

「私は有機農業を中心に勉強しました。篠山市、神戸市 北区、市川町などの農家でお世話になりました。また、 和歌山ではみかんづくり、大分や山口では野菜づくりを 勉強し、特に、有機肥料の作り方を学びました。私の村 では、歯を磨く習慣がありません。歯の衛生についても 学びました。帰国後は、先輩とともに有機農業を広めた いです」

#### ロザさん(インドネシア・女性)

「私は西スマトラの標高 1100mにある村から来ました。 兵庫県の各地で、保健衛生と洋裁の勉強をしました。 保健衛生では手洗いの大切さ、離乳食の作り方、妊婦の 衛生などを学びました。また、洋裁では型紙の作り方や ミシンの掛け方を練習しました。私の村には電気は来て いませんが、簡易水道はあります。帰国後は保育園に子 どもを預かり世話をしたいと思います」

#### ザーナウンさん (ビルマ・男性)

「私は電気も水道もない村から来ました。人口は 1700 人ですが、車が通れる道がなく、町からバイクか自転車 でしか来ることができません。主に、兵庫県で保健衛生 や農業の勉強をしました。特に、豊岡で土着菌を古米に 取り込み、これを土づくりに利用する方法を学びました。 化学肥料を使うと、土が涸れてしまいますが、この方法 だと良い土壌を保つことができます。帰国後はこの技術 を活かして、野菜、みかん、バナナなどを作ります。

#### 三木生活ガイド(韓国語版)完成

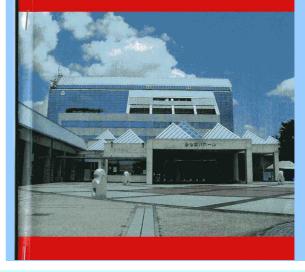
#### Miki Living Guide (Korean Version)

MIA has published "Miki Living Guide Book (Korean Version)" in March. This guidebook will be used by the people whose language are Korean. And they will be able to get the information about Miki City when they start their livings in Miki.

MIA では、市からの委託を受けて「三木生活ガイド (韓国語版)」の作成に取り組み、この度、完成させま した。外国人市民のための三木市での生活情報を集めた ガイドブックは、英語版がありますが、今回は外国人市 民の大半を占める韓国朝鮮籍の市民のために韓国語版 を作るよう依頼されたものです。

翻訳は、許 英玉、佐野 潤貞、喜多 圀光、宮崎和歌子のみなさんにお願いしました。日韓語対照の頁設定にし、日本語部には仮名をふりました。4月から、市役所の市民課などに置いて、利用していただきます。MIA事務局にも置きます。ご活用ください。

## 三水生活动化 [8] 四月 생활 가이트



#### 平成 22 年度「ことばの教室」 MIA Language Classes in 1010

来年度5月から言葉の教室9クラスを開講します。受講申し込み期間は3月から4月26日までです。詳しくは、「ことばの教室ちらし」「広報みき4月号」などでお確かめください。

#### 申込み先

〒673-0492 三木市上の丸 10-30 三木市国際交流協会 電話 0794-89-2318 Fax 0794-82-9755

E-mail: kokusai@city.miki.hyogo.jp

Events & Meetings from April to June 平成 22 年 4 月~6 月			
月・日(曜日)	時刻	場所	開始日・事業・講師・回数
4・21 (水)	13:00	三木商工会館	第1回理事会
5・10 (月)	10:00	教育センター	ことばの教室開始 英会話実用 Andrea Swenson 年間30回
5・10 (月)	19:00	教育センター	ことばの教室開始 日本語 ボランティア 年間 30 回
5・11 (火)	19:00	教育センター	ことばの教室開始 英会話中級 Grodzicki Nicholas 年間30回
5・11 (火)	19:00	教育センター	ことばの教室開始 韓国語初級 車 炯 チャヒョン 年間30回
5·12 (水)	19:00	教育センター	ことばの教室開始 英会話初級 A Kerr Kerry 年間 30 回
5·13 (木)	10:00	教育センター	ことばの教室開始 英会話初級 B 新田俊子 年間 30 回
5·13 (木)	19:00	教育センター	ことばの教室開始 中国語初級 山口玉花 年間 30 回
5・14 (金)	10:00	教育センター	ことばの教室開始 英語表現活動 河越恭子 年間 30 回
5・14 (金)	19:00	教育センター	ことばの教室開始 スペイン語初級 中田アルフレド 年間30回
5・21 (金)	10:00	教育センター	平成22年度総会・記念公演「インドネシア民族楽器の調べ」
6・20 (目)	10:00	教育センター	第1回国際理解講座「インドの経済」日印協会

三木市からコロワ市へ 中学生の絵画赤道を渡る

#### Paintings drawn by students of Miki will cross the equator to Corowa City

2005 年、MIA では姉妹都市バイセリア市に市内中学校生の絵画 30 点を送りました。バイセリアでは、それらの風景画がコンベンションホールや学校などに展示され賞賛を得ました。この度、当時の絵画に、その後描かれた絵画を加えて、もう一つの姉妹都市、豪州コロワ市に送ることにしました。指導とご協力いただいたのは三木中学校並びに自由が丘中学校に勤務する片寄教諭夫妻です。ありがとうございました。





「電車の駅」 二木中・滕本ささ・2001 牛作

# THE SECOND

「三木市国際交流協会」は平成8年(1996年)3月に発足しました。今年3月で、満14年の足跡を残すことになります。不況の中でも多くの会員のみなさまに支援をいただき予定の事業を終えることができます。特に、姉妹都市事業については、コロワ市からの訪問団を快く迎えることができました。また、バザーでは記録的な浄財を得、寄付することができました。パーティーや理解講座などへは、より多くの方に参加いただきました。みなさまの暖かい気持ちが交流事業を支えてくださいました。三木市の外国人市民の数は1000名を越えており、「にほんご教室」を訪ねる方も増えています。お互いが気持ちを出し合い、汗を流して気持ちを通じあわせた一年でした。ありがとうございました。

#### 編集·発行 三木市国際交流協会 Miki International Association

〒673-0492 三木市上の丸町 10-30 (市民協働課内) 電話 0794-89-2318 Fax 0794-82-9755 E-mail: kokusai@city.miki.hyogo.jp